

川合仲象『本朝小説』の書名について 小説を中心として

岡山大学大学院 劉佳佳

【発表要旨】

『本朝小説』は、福山藩の川合仲象（1728－1804）によって作られた白話体の漢文小説である。物語は、阿岸という女性が、夢で恋人である熊坂長半の新婦を呪い殺したことを発端として、長半の旅と坂田公時に対する殺人、公時の娘阿岩による長半への復讐と展開していく。

この小説は、多くの詩歌を引用しながら話を進めている点に特色があり、『唐詩選』・『和漢朗詠集』・『古文真宝』・『今古奇観』などの典籍から、漢詩・俗謡・俚諺などを 130 箇所引用している。このような特異な小説でありながら、これまで、『本朝小説』に関する本格的な先行研究はなく、石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』（清水弘文堂、1940 年）で簡単に言及される程度である。

発表者は今回、『本朝小説』という書名に注目した。平安時代より「本朝〇〇」は書名の中に幅広く使用されており、特に漢学（『本朝詩英』、『本朝異学問答』）、医学（『本朝医考』、『本朝医談』）、兵学（『本朝軍器考』、『本朝鎧色考』）などの分野に多く用いられている。一方、江戸時代までの日本の書籍の書名には「小説」という用語が見当たらないようである。『江戸時代書林出版書籍目録集成』（井上書房、1963 年）によれば、宝暦四年（1754 年）に「小説」は初めて独立した一門として、九冊の白話小説を収録しているという。国書データベースによれば、刊行年が明確な書籍の中で、最初に書名に「小説」という文字が現れたのは、元禄十一年（1698 年）に刊行された駒谷散人『有職小説』であった。その後、林鳳岡『寛永小説』、伊勢貞丈『安斎小説』、秋水園主人『小説字彙』など、「小説」を書名に冠する書籍が出版された。しかし、これらの書物の内容は様々であるため、各書名に用いられた「小説」の意味を明らかにすることが必要だと思われる。

そこで、今回の発表では、書名における「小説」という用語に焦点を当て、『本朝小説』まで「小説」を書名に用いた書物の内容について考察し、川合仲象が書名に「小説」という語を用いた理由について探してみたい。

⑥

・発表タイトル 「七夕の朝顔」考

・発表要旨

宗祇の七夕の発句に「朝がほの名におふ星の契り哉」がある。七夕の句にアサガオを詠むことは「槿を牽牛花と云心、又星の契りも朝がほもはかなき心也」（愚句老葉）と説く通り、漢名「牽牛花」に由来する。歌語「あさがほ」は早く『萬葉集』から用いられるが、七夕と結び付ける例は、室町時代以降まとまって見える。本発表では、日本の詩歌におけるアサガオ詠の展開を踏まえ、七夕のアサガオを詠む趣向の広がりについて考察する。

歌語「あさがほ」は、「あさがほを何はかなしと思ひけん人をも花はさこそ見るらめ」（拾遺集）など、その盛りの短さが詠まれる。一方和歌などにおいて「あさがほ」を表記する際、広く用いられた「槿」（本来ムクゲを指す）は、王朝漢文学において「槿籬に暮に投る花無し」（和漢朗詠集）と、夕べを待たずしおれるさまが詠まれる。こうした趣向は、「朝に栄え暮に落つ」（文選張銑注）のような漢籍における「槿」の影響を受けたものと考えられ、後代にも受け継がれる。

他方、それまで詩語として全く顧みられなかった「牽牛花」は、南北朝時代以降、禅林の文学にいたってにわかに愛を得る。これら禅僧の牽牛花詩には、彼らの親炙した宋詩の影響が顕著である。また、こうした「牽牛花」愛好の中で七夕の「牽牛花」詩も多く登場し、「牽牛花」は七夕の詩会における定番の題材ともなる。宗祇の句のような和文学における「七夕の朝顔」もまた、従来の「あさがほ」詠が、禅林の動向の影響を受けたものと推される。

一面「牽牛花」の盛行は同じ和訓を持つ「槿」との混乱をときに生じ、「日本の俗に以て槿薺共に牽牛花と為す。…是れ大いに誤れり」（下学集）とその区別が注意された。しかし、こうした混乱は新たな表現のあやを生み出す契機ともなった。その注意すべき事例が中世流行した和漢聯句である。特に「槿」の漢句と七夕の句とが付合になる例からは、和漢の齟齬が生んだ影響が見て取れる。

『懷風藻』吉野二首詩の漢籍受容

—二首構成の中國詩との比較を通して—

京都府立大学大学院共同研究員 内田 夫美

『懷風藻』には吉野を詠む二首構成の詩が三例ある。同様の形式が漢籍にある為、そこには漢籍よりの受容が想定される。本発表では『懷風藻』の吉野二首構成詩と中國の南北朝から初唐にかけての二首詩とを比較して、その構成や作品を検証する。

漢籍の二首詩は、樂府等で一詩題にそれぞれの二首を詠むもの、後世の編纂で本来は別のものが二首にまとめられたもの以外の大半が、第一詩と第二詩とが関わり合う連作である。これらのうち、第一詩・五言八句、第二詩・五言八句の藤原史「遊_二吉野_一二首」(『懷風藻』31・32)のような形式の二首詩は、初唐に多い。だが、北周の庾信「和_三吳法師遊_二昆明池_一二首」(『庾子山集』卷四)も同形式で、詩題に「遊」とあり、第一詩と第二詩には時間の経過が見られる。これらを範とするならば史の吉野詩も連作であり、また時間の経過に従って二首構成詩に表現されたと考え得る。そして、第一詩の「_レ翠、_レ紅」は、王勃「乾元殿頌」序に「九衢翻_レ翠、_レ四照霏_レ紅」(『王子安集』卷十一)とあり、第二詩の「夏身夏_レ色古 秋津秋_レ氣新」の、夏秋同字使用の遊戲的手法は、高宗「七夕宴_二懸圃_一二首」(『全唐詩』卷二)第二詩に「促_レ飲今夕促 長_レ離別後長」、夏から秋への移行表現は、上官儀「奉

和_レ過_二旧宅_一「_レ応制」に「石関清_二晚夏_一」璇輿御_二早秋_一」(『全唐詩』卷四十)とあつて、これら初唐詩の表現は王権そのものや王権讚美の中にあり、その意が史詩にも包含されるのではないか。

中臣人足「遊_二吉野宮_一二首」(45・46)、大伴王「從_二駕吉野宮_一「_レ応詔二首」(47・48)は、第一詩・五言八句、第二詩・五言四句の形式で、この形式は漢籍にも珍しく、明確なものが梁の沈約「和_二劉中書仙詩_一二首」(『沈約集』卷一)である。これらには仙境を詠むという関連性があり、人足詩はその地を桃源以上、沈約詩は殊庭以上と賞讚すること、大伴王詩は「南北」「西東」と方角を詠み、沈約詩も「西北」「東南」と方角を記すこと等、沈約詩を範とした可能性が看取される。以上、史の吉野二首詩には、構成等に北周の庾信詩に近い部分があり、表現は初唐詩に倣うという、北周から初唐詩までの影響が強く窺え、その表現より王権讚美を包含すると理解される。他の吉野二首詩は、梁の沈約詩を範としている。

菅原道真の詩の国風

―『万葉集』の歌との関わりを求めて―

大谷雅夫

菅原道真の詩には中国の詩作に類例のない表現が少なくない。讃岐守時代に南山に遊んだことを詠う七言律詩の尾聯「州民縦訴ニ監臨盜一、此地風流負戴還一」（『菅家文草』卷三・二三二）もその一例である。中国詩人の行遊の詩なら、この地に留まりたい、再遊したいなどと結ぶところを、道真はこの美景を持って帰りたいと詠う。そのあまりにも非現実的な願望の表現は、詩には例がなく、しかし『万葉集』には「玉津島見れども飽かずいかにして包み持ち行かむ見ぬ人のため一」（卷七・一二二）などの先例をもつものである。そのように、中国詩ではなく、和歌の伝統の方につながる詩の表現を和習と称するなら、道真の詩には和習が多く、それらは平安の人々の心の表現となっている。

彼の師の島田忠臣の詩作にもすでにそれがあった。中秋の月を詠む二つの絶句の「未_三曾投レ轄滞ニ銀輪一」（『田

氏家集』上・二〇）、「争教_下天柱当_レ西峙、碍_二滞明光_一不_中肯沈_上」（同・六二）は、月の沈むのを惜しんで、月の「銀輪」のクサビを捨ててしまいたい、「天柱」で月が西に進むのを邪魔したいと詠うものだが、そのような不合理な願望の表現は中国詩にはなく、やはり『万葉集』の「ぬばたまの夜渡る月を留めむに西の山辺に関もあらぬかも」（卷七・一〇七七）の和歌表現の伝統を受けるものである。

月を留める関が欲しいと詠うのは月を擬人化する表現だが、道真にはその類の詩句が多い。十四歳の作の「将_レ来暖気宿_二誰家_一」（卷一・二）は春の暖気を旅人に擬し、辞世の詩の「病追_二衰老_一到、愁趁_二謫居_一来、此賊逃無_レ処、観音念_一廻」（『菅家後草』五一三）は「病」や「愁」を「賊」と称する。その著しい擬人も『万葉集』を継ぐ表現であり、道真の詩の「国風」と言える。